誘惑ビーチハウス

～伯母の熟れ肌・従姉の若肌～

芳川葵
挿絵／くろふーど

立ち読み版

KTC
KILL TIME COMMUNICATION

Contents

目次

第一章　展望風呂・伯母との蜜戯……4
第二章　無人島での一夜と伯母の熟壺……44
第三章　従姉が女に変わるとき……109
第四章　暴かれた背徳……164
第五章　無人島・禁忌の3Pツアー……214

登場人物 *Characters*

峰岸 明人
(みねぎし あきと)

調理師学校に進学希望の高校三年生。夏休み中、伯母家族が経営する民宿「笠原荘」でアルバイトをする。従姉の百合香が初恋相手だが、恋心を打ち明けられずにいる。

笠原 百合香
(かさはら ゆりか)

短大卒業後、実家の民宿を継ぐために女将修行中の二十一歳。明人の従姉。美人だが気取ったところがなく気さく。健康的な張りのある肌に91センチFカップの美巨乳を持つ。

笠原 淑恵
(かさはら よしえ)

柔和な美貌と優しい性格で「笠原荘」を支える女将。百合香の母であり明人の伯母。四十一歳の熟肌をもてあましている。百合香を超えるほどの爆乳。

第一章　展望風呂・伯母との蜜戯

－1－

雲ひとつない青空から照りつける夏の日差しが、海面に乱反射して目映いほどの煌めきを生み出し、海から漂う微風が潮の香りを運んできていた。

七月最後の日曜日を迎えた砂浜には、レジャーマットを敷いた家族連れの姿が目立ち、子供たちが楽しげに走りまわっている。都心から車で二時間。太平洋に面した小さな海水浴場は、波も穏やかなため、家族連れに人気のスポットであった。

はしゃぎまわる子供たちの様子を微笑ましく見つめた峰岸明人（みねぎしあきと）は、すぐに目の前の鉄板へと視線を戻した。

ジュゥ～、ジュゥ～……。両手に持ったヘラで山盛りの焼きそばを炒めていく。豚バラ肉に、たっぷりのキャベツ、それにタマネギ、ピーマン、ニンジンなども加わった、たっぷり野菜の焼きそば。

プラスティックボトルに入ったソースを全体にかけると、満遍なく行き渡らせるべく、せっせと両手を動かした。ソースの焦げる香ばしい匂いが、あたり一面に広がっていく。同時に、ムワッとした熱気も顔面を襲い、毛穴から汗が噴き出してきた。

（あっついな、ちきしょう。僕だって海に入って遊びたいよ）

右手に持ったヘラをいったん鉄板の脇に置き、首からぶら下げた白いタオルで滴り落ちる顔の汗を拭うと、今度は少し恨めしそうな視線を、海で遊ぶ人々に向けてしまった。鉄板横の台に置いてある、冷たさなどとうの昔に消え去ったペットボトルのお茶で喉を潤し、再びヘラを掴む。

明人は都内の公立高校に通う三年生。卒業後の進路は、調理師になるための専門学校を希望していた。特別な受験勉強が必要ないこともあり、一週間ほど前から、伯母夫婦が営む民宿「笠原荘」の手伝いを、住みこみで行っていたのだ。

（百合ねぇと一緒だから、まだ頑張れるけど、海の家の仕事が、こんなに大変だったなんて……）

焼きそば作りに励みながら、明人はチラッと後方に視線を向けた。そこでは、従姉の笠原百合香が客の相手をしていた。白いTシャツにデニムのホットパンツ姿の二十一歳の従姉。

海の家は、笠原荘が毎年、夏季限定で営業しており、今年は明人が手伝いに来ていることもあって、短大を卒業後、民宿を継ぐための女将修行中である百合香と二人で切り盛りすることになったのである。

砂浜に面した場所で、明人が鉄板焼きそばを作り、接客全般は百合香が担当。

海の家では焼きそばのほかに、串に刺したフランクフルトも鉄板で焼いて売っており、そちらも焦げないように転がさなくてはいけなかった。さらに、冷たいペットボトル飲料も扱っていて、そちらは大量の氷水の入った大型のクーラーボックスで冷やされている。

（大変な思いをしているだけの売り上げがあるからいいけど、これで売り上げも悪かったら、ほんと、最悪だよ。いくら百合ねぇと一緒でも、それは勘弁だよなぁ）

いったん鉄板に意識を戻し、焼きそばとフランクフルトの世話をすると、またチラッと後ろに視線を向けた。

従姉が着ているTシャツは明人とお揃いで、背中に「笠原荘」の名前がプリントされたものだが、そのシャツの裾を、左脇腹のあたりでキュッと結んでいるため、百合香が身体を動かすたびに、ピチピチとした腹部と、形のいい臍がチラチラと見えていた。

ホットパンツからスラリとのびた脚は、モデルとしても通用するのではないかと思えるほどの美脚で、引き締まった足首からなだらかな曲線を描くふくらはぎ、そして適度な肉づきの太腿へとつづいている。

その美脚は、Tシャツの裾からチラッと覗く腹部の白さとは対照的に、うっすら小麦色に日焼けし、健康的な色気を醸し出していた。

（ほんとに百合ねぇは綺麗だなぁ）
うりざね顔の典型的な美形。長い睫に二重瞼の切れ長の瞳は、知的でありながらどこか柔らかい印象もあり、真っ直ぐに通ったほどよい高さの鼻筋と、ふっくら可憐な朱唇は、ほとんど化粧っ気のないいまも、輝くほどに美しかった。
（スタイルも抜群だし。やっぱり恋人、いるのかな？　――いるよな。だって、あんなに美人なんだもん）
ポニーテールにした、明るい栗色に染めたストレートヘアが軽やかに揺れている。
さらに、Tシャツの裾を結んでいる関係で、シャツの生地がピタリと従姉の肌に張りつき、豊かな胸の膨らみを浮かびあがらせていた。
百合香はTシャツの下に水着を着用しており、青っぽい水着地と黒いドット柄のビキニトップが、うっすらと透けて見えている。
（百合ねぇの胸、ちょっと動くだけであんなに……）
ビキニトップはさすがに下着ほどのサポート性はないらしく、従姉が身体を動かすたびに、たわわな実りが、ぷるん、ぷるんっと弾むように揺れ動いていた。
（いいなぁ、百合ねぇの彼氏。あのオッパイも好きなだけ、触れるんだよなぁ）
三つ上の従姉に昔から好意を寄せていた明人は、会ったことのない百合香の恋人に嫉妬の思いを沸き立たせてしまった。

「んっ？　どうしたの、明人、ボーッとして。できた焼きそばは鉄板の端に寄せておかないと、焦げちゃうわよ」
「あっ、うん、そうだね。ごめん」
明人の視線に気づいた百合香は小首を傾げると、そんな注意を送りながら近づいてきた。その声にハッと我に返り、慌てて鉄板に向き直る。
ジュウ、ジュウと音を立て、改めて焼きそばを炒め、鉄板の温度が低い端へと移動させようとした。
「待って、明人。たぶん、お客さんが来たから、もう少し、そこで炒めていて」
「えっ？」
鉄板横へとやってきた百合香の言葉に明人がチラリと砂浜に視線を向けると、こちらに向かってくる、一組の家族連れの姿が目に入った。
「さすが百合ねぇ、よく見ているね」
「明人がまわり見えていないだけよ。これからが稼ぎ時なんだから、頑張ってよ」
「うん」
時刻はもうすぐ正午になろうとしていた。これから一時間ほどが焼きそば作りのピークになることは、ここ一週間ほどの経験で充分、理解していた。
（これからの一時間、百合ねぇとはほとんど会話できないからな。その前にこうやっ

て少しだけど、話ができてよかった）

かき入れ時は二十人ほど収容可能な海の家は満席となり、注文のやり取り以外、従姉と話をする時間など皆無であった。それだけに、他愛のない会話であっても、明人にとっては嬉しい時間なのだ。

海の家は、簡素な作りながら、食べかすなどのゴミで砂浜を汚さないよう、板張りの床が作られ、砂浜から一段高くなっている。当然、屋根も載っており、直射日光は遮られていた。四方に壁などなく手すりがグルリと取り囲んでいるだけだが、砂浜よりは涼しく感じられるため、昼時には客が集まるのだ。

「いらっしゃいませ」

件（くだん）の家族連れ、四十前後と思われる夫婦と十歳前後の男の子が鉄板前にやってくると、明人はすぐに笑顔で声をかけた。バイトをはじめた直後は、笑顔もぎこちなかったが、一週間もつづけていれば手慣れてくる。すると、代表して子供が口を開いた。

「焼きそば三つ、一つは大盛りにしてください」

「はい、ありがとうございます。中でお召し上がりになりますか、それとも、お持ち帰りなさいますか」

「座れる？」

「はい、大丈夫ですよ。焼きそばはお運びしますので、そちらから中へどうぞ」

母親と思しき女性の声に、すかさず百合香が鉄板脇の、一箇所だけ手すりのない出入り口を手で示した。すぐに子供が二段の小さな階段を駆けあがり、屋根の下へと入ってくる。両親がそれにつづき、長テーブルに向かい合わせで座った。

その間に明人は使い捨ての紙皿を三つ並べ、作ったばかりの焼きそばを盛りつけていく。海の家の中で食事をする客には紙皿で、レジャーマットに持ち帰る客には透明なプラスティック容器に入れ、提供するようにしていた。

ふたつの紙皿には一人前を、最後のひとつには一・五人前を盛りつけると、再び戻ってきた百合香がお盆に載せ、運んでいった。

その家族連れを皮切りに、それ以降は本当に目のまわるような忙しさに襲われた。汗を拭き吹き焼きそばを作りつづけ、フランクフルトを焼きつづけたのである。

(はぁ、疲れた。腕もパンパンだよ。明日は月曜だから、少しは楽かもしれないな。それに、天気予報でも雨って言ってたし、一息つけるかも)

午後十一時をすぎた頃。明人はあてがわれた六畳の和室に敷いた布団の上に、大の字になっていた。両腕にはいまだに怠さが残り、握力も完全には戻っていない。

笠原荘は三階建てで、客室は二階に三部屋、三階に二部屋の計五室とこぢんまりとしていた。客室の内風呂には温泉が引かれ、元板前の伯父が作る絶品料理が評判の宿

である。そのため、小さいながらもリピーターが多く繁盛していた。
民宿の一階には玄関や事務室、調理場、その奥に笠原一家の自宅部分があり、明人も一階にある部屋を使わせてもらっていたのだ。
昼間、やっと一段落ついたのは一時間半以上が経った、午後二時前。用意していた食材を使い切った直後であった。その後も冷たい飲み物を買い求める海水浴客の相手をし、海の家を閉めたのが午後五時前。
しかし、それで仕事が終わったわけではない。百合香の運転する軽自動車で民宿に戻ってからは、そちらの手伝いが待っていたのだ。
（短い距離とはいえ、海から家までは登り坂だから、歩かないですむのは楽だけど、疲れの軽減にはほとんど関係ないな）
民宿は海水浴場から徒歩五分ほどの距離にあるのだが、食材などの荷物があるため、毎日、車で往復していた。とはいえ、一日中鉄板前で立ち仕事の明人の疲れは、確実に蓄積されていた。
（お風呂にゆっくり浸かって、身体中の疲れを解そう。こういうとき、やっぱり温泉はいいよな。あっ！　でも今日の風呂掃除、僕が当番だ。まっ、それは仕方ないか）
三階には貸し切りの大きな浴場があり、展望風呂として海に沈む太陽を眺めながらの入浴を楽しむこともできた。こちらにも当然、温泉が引かれている。宿泊客の利用

は午後十時までで、それ以降、伯母の笠原淑恵、従姉の百合香、そして明人の三人が順番に入浴し、最後に入る者が、出るときに掃除をする決まりであった。伯父は朝が早いこともあり、一階の自宅の風呂を使っており、この時間、すでに就寝している。

「う〜ん」

横になったまま腕を頭の上にのばし、大きくのびをすると、片膝を立てるようにして、左右に一度ずつ腰を捻った。ゴキゴキ、ゴキッと背骨が鳴る。

直後、閉めてある襖戸の向こうから、百合香の声が聞こえてきた。

「明人、いい？」

「うん、いいよ」

明人が上体を起こしたのと、従姉が襖を開けたのがほぼ同時であった。

「ごめんね、遅くなって。お風呂、空いたからどうぞ」

部屋に一歩、二歩と入ってきた百合香が、柔らかな声音で口を開いた。

「ありがとう。伯母さんはもう入っているんだよね？　今日は僕の掃除当番だから」

「ええ。まだ事務室で仕事しているみたいだけど、私の前に入っているはずよ」

「了解」

百合香と短い会話を交わしつつも、明人の視線は目の前に立つ美しい従姉に釘づけであった。湯上がり直後で、ほんのりとピンク色に上気している相貌は、健康的であ

りながらどこか悩ましくもあり、ボディソープやシャンプーの匂いと相まって、思春期少年の心をくすぐってくる。

さらには、百合香が着用しているパジャマにも、明人は刺激を受けていた。

なんの変哲もない、普通のピンク色のパジャマなのだが、その胸元には確かな盛りあがりが存在している。それだけならまだしも、従姉は入浴後にブラジャーを着用する習慣がないらしく、少し身体を動かすだけで、ぷるん、ぷるんっと魅惑の膨らみが昼間以上に悩ましく揺れるさまが、視界に飛びこんでくるのだ。

（百合ねぇのオッパイ、やっぱり大きめだよな。若いから張りがあるはずなのに、ちょっと身体を動かすだけで、揺れちゃうんだもん。あぁ、一度でいいから、ナマで見たり、触ったりしたいなぁ）

一日の仕事を終えて疲れがピークに達していながらも、明人の股間は敏感な反応を見せはじめていた。さり気なく両手を股間部に這わせ、百合香に気づかれないよう硬度を増したペニスを、楽な位置に調整させていく。

「はい、これ鍵ね。出たあと、忘れずにかけるのよ」

「分かってるよ」

目の前までやってきた百合香の差し出す展望風呂の鍵を、頷きながら受け取った。

展望風呂は時間貸しで使ってもらっているため、使用されていないときは脱衣所に

外側から鍵がかかっていた。使用時に鍵を貸し出し、利用が終わったら、返してもらう仕組みである。鍵は二本、貸し出しに使っているものと、マスターキーがあり、いま従姉に渡されたのは、貸し出し用のものだ。マスターキーは伯母が管理している。

「今日は忙しくて疲れただろうから、ゆっくりお風呂で温まって疲れを癒したら、早めに寝なさいね。仕事は休みなく明日もつづくんだから。まぁ、明日は天気がぐずつくみたいだから、さほど忙しくないでしょうけど」

「だね、僕もさっき天気予報、見たよ」

目の前に立つ美しい百合香にウットリとなりながら、明人は同意の首肯をした。

「じゃっ、私は先に休ませてもらうね。おやすみ」

「おやすみ」

就寝の挨拶を返すと、百合香は整った美貌に優しい笑みを浮かべ出ていった。

「あぁ、百合ねぇ、好きだよ。大好きなんだからね」

ウットリとした囁きを漏らし、いきり立つ強張りをひと撫でする。刹那、ゾクリと腰骨が震え、ペニスが大きな胴震いを起こした。ピュッと下着の内側に先走りが溢れ出す。その愉悦に、ハッと意識が引き戻された。

（いけない、イケナイ。扱(しご)いてやりたいけど、やるべきことをやってからだよな）

首を小さく左右に振った明人は、事前に用意し、枕元に置いておいた着替えを手に

すると部屋を出て、三階の浴場へと向かうのであった。

「あぁ、気持ちいい〜〜〜〜。やっぱり温泉は最高だ」

大きな浴槽に身を沈めた明人の口から、自然と安らぎの呟きが漏れ出た。

温かい湯に浸かっていると、全身から疲れが流れ出していくような気分になる。

高台に建つ民宿。その最上階である三階。海に面した側には嵌め殺しの大きなガラス窓があり、海沿い道路の街灯の明かりによって、夜の闇に沈んだ砂浜とその向こうに広がる広大な海がうっすらと見えていた。

さらに目を凝らすと、海の中にポツンと小さな明かりが灯っているのが分かる。陸地から数キロ先にある小さな無人島。そこに設置された航行安全の常夜灯だ。

明人はまだ行ったことがないが、地元の旅館や民宿はその島に渡るツアーを共同で行っていた。そのため、小さいながらも桟橋があり、そこに昼間の太陽光で蓄電した電気を使って常夜灯を灯しているのである。

（そういえば、百合ねぇが今度、連れていってくれるって言ってたよな。まっ、海の家が忙しいから、いつになるかは分からないけど、楽しみだな）

一週間前、民宿にやってきた際、従姉から言われた言葉が脳裏に甦った。同時に、先ほど目の当たりにした百合香の姿も思い出され、おとなしくなっていた淫茎がピク

ッと小さく震えてしまう。
「百合ねぇ……」
小さく呟いた直後、カラカラッと音を立て、浴室の引き戸が開けられた。
ハッとした明人が、ザバッと音を立て振り返ると、驚いたことに手拭いを手にした伯母の淑恵が、裸で立っていたのだ。伯母もまさか甥が入浴しているとは思わなかったのだろう。浴室に足を踏み入れたところで、呆然と立ち尽くしている。
「お、オっ、伯母さん！」
上ずった驚きの声が浴室に反響した。突然の淑恵の登場に、思考は完全にストップしていたが、年頃の少年の目はしっかりと機能しつづけ、目の前に立つ熟女の裸体を網膜に焼きつけていた。
母、佐和子の姉である淑恵は、母よりひとつ年上の四十一歳。顔立ちは娘の百合香より若干丸みを帯びたうりざね顔であった。柔和で優しげな瞳が、驚きに見開かれている。鼻は親しみやすい丸鼻で、朱唇は従姉よりも肉厚であった。
（伯母さんの身体、凄い……）
明人の喉が自然と上下に動いた。それほどまでに淑恵の肉体はグラマラスであり、少年の性感を一気に煽り立て、湯船の中でペニスが痛いほどに屹立してしまった。
砲弾状に突き出た双乳はたっぷりとした量感に溢れ、立ち止まってなお熟肉が余韻

で揺れている。二十一歳の従姉に比べれば浅いものの、ウエストにも括れが見られた。
（伯母さん、なんてエッチな身体をしているんだ。まさか、伯母さんの裸がこんなに凄かったなんて……。オッパイなんて、絶対に百合ねぇよりも大きいよ）
海の家で働いている従姉の、Tシャツ越しの胸の膨らみや、風呂が空いたことを知らせてくれたときの、パジャマを盛りあげていた膨らみよりも、いま目の前にいる熟伯母の双乳のほうが、確実に一回りは大きそうだ。
（それに、お尻は完全に、伯母さんのほうがボリュームがありそうだぞ）
伯母の裸を正面から見ているため、ヒップを直接目にすることは叶わないが、双臀は乳房同様のボリュームに溢れていそうであった。
直接ヒップを目にできない代わりに、明人の視線の先では、デルタ型をした熟女の陰毛が丸見えになっていた。黒い叢はこんもりと盛りあがっている。
（毛だ！　伯母さんのオマ〇コの毛までが丸見えに……。あの奥にオマ〇コが……）
腰が震え、完全勃起の先端から、ジュワッと先走りが湯の中に滲み出していく。
「ご、ごめんなさい。まさか、アキ君が入っているなんて、思わなかったから。そうよね、電気、点いたままなんだもの、誰かいるって思うのが当然よね。それに、脱衣所もちゃんと見れば、アキ君の服があったはずなのに、ほんとヤダわ。私ったら、なにを見ていたのかしら」

先に我に返ったのは伯母であった。しかし、相当テンパッているのか、早口で言い訳めいた言葉ばかりが口をついて出ている。だが、その淑恵の声によって、明人も一気に現実へと引き戻されたのだ。

（ハッ！　そ、そうだよ。伯母さんが来たってことは、伯母さんはまだお風呂、入っていなかったんだ。きっと百合ねぇが勘違いしていて、それで……。伯母さんの裸に見とれている場合じゃないじゃないか）

「あっ、いや、ぼ、僕のほうこそ、ごめん。僕が最後だと思っていたから、それで……。あの、す、すぐに出るから、ちょっ、ちょっと、待ってて」

淑恵の焦りが伝染したかのように、明人も急にしどろもどろになってしまった。

伯母の裸体から視線を逸らし、湯船から出ようと、腰を持ちあげかけたそのとき、自身の股間が完全勃起の状態で、下腹部に張りつかんばかりであることに気づいた。

（ど、どうしよう。お風呂から出て、先に伯母さんに入ってもらわなくちゃいけないのに。ここ、大きくしたまんまじゃ、あがるにあがれないよ）

一瞬、腰を浮かせたのだが、次の瞬間、羞恥で顔面が一気に赤らみ、ザバッと再び肩まで浸かってしまうのであった。

「あっ、いいのよ、そのままで。せっかくだから、一緒に入りましょう」
「えっ⁉」
（えっ？　私、なに、言っちゃってるのかしら）
笠原淑恵は、自身の口から出た言葉に、甥の明人同様、内心、ハッとさせられた。なにせ淑恵は全裸であり、手拭いを持っていたとはいえ、身体を隠してはいないのだ。つまり、高校生の甥に、熟れた裸体を惜しげもなく晒しているということである。
（――でも、ここで恥ずかしがった態度を取りつづけたら、それはそれで、アキ君の心に負担を強いてしまうかもしれないし、変に意識した態度はよくないものね）
オロオロとした明人の様子を目の当たりにし、テンパッていた心が、すっと落ち着きを取り戻す。
（そうよ。お風呂くらい、小さい頃は何度も一緒に入ったことあるんだもの。いまさら、気にするようなことじゃないのよ。だから、身体だって、このままで……）
自分自身に言い聞かせると、淑恵は甥に気づかれないよう、小さく深呼吸をし、浴槽へと歩み寄った。風呂桶で湯船から湯を汲み取り、それを身体にかけてから、明人の左隣に身を沈めていく。
「久しぶりね、アキ君と一緒にお風呂に入るのなんて」
「う、うん、そうだね。たぶん、小学校の低学年の頃、みんなで一緒に旅行に行った

とき以来じゃ、ないかな」
会話の糸口を探るべく、淑恵から口を開いた。その声が、少しかすれ気味になっていたのは、仕方がないところである。なにせ淑恵自身、若干の緊張を覚えているのだ。
だがそれは、明人も同じ。いや、きっと伯母以上の緊張の中にいるのだろう。返事をしてきた声が、裏返りそうになっている。逆にそれが熟女の緊張を解してくれた。
（あのとき以来か。かれこれ十年近く前ね。アキ君も百合香も、大きくなるわけだわ）
甥の言葉に、十年前、夫の両親から引き継いだ民宿を改装する期間を利用して、妹家族と旅行に行ったことが思い出された。
「あ、あの、伯母さん、ごめんね。百合ねぇに聞いたら、僕が最後だって言われたから、それで……。まさか、伯母さんがまだ入っていなかったなんて、知らなくて」
「うふっ、いいのよ。この週末はお客さんもいっぱいで忙しかったから、やらなくちゃいけない事務作業が溜まっていたのよ。それをやっていたら、こんな時間になっちゃって。十時半すぎに百合香が事務室の外から、『お風呂いい？』って聞いてきたから『いいわよ』って答えたんだけど、それで勘違いさせちゃったのね」
「そう、だったんだ」
「ところで、どう、海の家の仕事には慣れた？」
「うん、それはどうにか。最初は鉄板で大量の焼きそばを作るのに、少し苦戦したけ

ど、何度か作っているうちにコツも掴めたから。でも、腕はパンパンになっちゃうし、ずっと立っているから足も怠くなっちゃうのは、相変わらず。それに日差しの暑さじゃない、鉄板からの熱気ですごく熱いのには、まだ慣れないかな。それでも僕は焼きそばを作っているのがメインで、あとのことは百合ねぇが全部やってくれるから」

「そうなの。でも、アキ君の焼きそば、評判いいのよ。去年までと比べて、倍近くも出ているもの」

甥の言葉に、淑恵は母性的な笑みを浮かべて返してやった。

妹夫婦は共働きのため、家事全般の多くを明人がこなしているのは知っていた。その中で甥が料理に興味を持ち、高校生にしてなかなかの腕前になっていることも、妹から聞いていたことだ。

去年までは夏休みの間、明人は父親、淑恵にとっては義弟の実家に遊びに行っていたのだが、今年は祖父母が旅行に行く予定があったため、それならばと妹を通じて、民宿の手伝いに来ないかと打診したのである。

「そうか、僕、少しは役に立てているのか。なら、よかった」

「役に立っているなんてレベルじゃないわよ。伯母さんとしては、ずっといて欲しいくらいだもの」

ハニカミ笑いを浮かべる明人に、優しく返してやった直後、淑恵はあることに気づ

いてハッとした。甥の目がチラチラッと熟女の双乳に向かっていたのだ。
砲弾状に実った熟れた膨らみは、湯面にぷっかり浮いているように見える。四十路に達し、若い頃に比べればいくぶん形も崩れはじめてはいたが、それが逆に豊満さと柔らかさを強調している部分もあった。
（えっ？　まさかアキ君、私の裸に興味が……）
それは明人が浴室にいたとき以上の驚きを淑恵にもたらした。それまで淑恵は、羞恥心から甥が湯から出ようとしたと思っていたのだ。四十をすぎた伯母の裸体に性的興奮を覚えたため、とは頭の片隅にも浮かんでいなかったのである。
（男の子を育てた経験がないから、分からなかったけど、高校生の男の子が四十すぎの女に、それも伯母に対してエッチな気持ちになるだなんて……。甥との入浴を簡単に考えすぎていたわ。でもさすがにいまさら身体を隠すのも変だし、困ったわ）
意識してしまうと、それまで平気だったにもかかわらず、一気に羞恥が募った。
チラッと甥の股間部分に目を這わせた刹那、熟女の下腹部に重たい疼きが走った。
（すっ、凄い。アキ君のオチンチン、あんなに大きくなっていただなんて……）
両手で股間を隠すようにしていたが、それでも明人のペニスが隆々とそそり立っていることが確認できる。それを目にした途端、肉洞がムズムズしだした。腰が小さくくねりそうになり、湯面に小さな波を立ててしまう。

（ダメよ、なにを考えているの。アキ君は甥っ子なのよ。その甥っ子のオチンチンを見て、変な気分になるなんて、伯母としてあってはならないことだわ。なのに……）
頭では理性が働いていながら、下半身では本能的な活動が本格化しそうになっていた。子宮がキュンッと震え、膣襞が刺激を求めて蠢きそうになっている。
（――硬くなっているオチンチン見るの、何年ぶりかしら？　五年、六年？　うぅん、それ以上だわ。かれこれ八年近く経っているかも……。まさか、アキ君の硬くなったのを見ることになるだなんて……。見てはダメよ。あぁん、でも……）
夫と最後にセックスをしたのが三十代前半の頃であったことを思い出し、その空閨（くうけい）を妬むように、肉洞内がいっそうのざわめきに見舞われた。腰がブルッと震え、その身震いでチャプッと音が立つ。その小さな水音が淑恵を現実へと引き戻した。
「やっ、やぁね、アキ君ったら、伯母さんの裸を見て、どこを大きくしているのよ」
「あっ、こ、これは、あの……。ごっ、ごめんなさい」
わざと冗談めかした口調で言うと、甥の顔面がそれまで以上に赤くなった。身体を縮こまらせ、同時に両手をいっそう股間に密着させ、強張りを隠そうとしてくる。その初心な態度が、四十路熟女の母性をくすぐってきた。
「百合香の裸を見てならまだ分かるけど、四十すぎの伯母さんの裸で興奮するなんて」
「ゆ、百合ねぇの、は、裸……ゴクッ」

娘の名前を出した瞬間、明人の顔に恍惚感が浮かんだ。百合香の裸体を想像してしまったのだろう。生唾を飲む音が聞こえ、甥の総身が大きく震えた。
明人が百合香に憧れ以上の感情を持っていることは、淑恵も気づいていた。従姉に対して持つ感情としてはどうかとも思うが、娘自身、昔から明人を弟同然に扱っており、二人の間に特別な関係はなさそうなことから、黙って見守っていたのだ。
（アキ君、本当に百合香のことが好きなのね）
甥の素直な反応に微笑ましさを覚える一方、久々に屹立した男性器を見た女の感覚が、娘への嫉妬に似た感情を沸き立たせてきた。
「あらあら、伯母さんの前で百合香の裸を想像するなんて、アキ君もイヤラシイ男の子になっちゃったのね」
からかうような、それでいて少し拗ねた感じの言葉が口からこぼれ出た。
「僕は、そんな、百合ねぇの裸なんて、ンはっ、くッ、はぅ、お、伯母さん！」
後ろめたさを隠すように、一段と上ずった声音で言い訳をしようとした明人の声が、途中で一気に跳ねあがり、浴場に反響した。
目覚めはじめた女の感情の影響で、蠱惑の微笑みを浮かべて甥を見つめていた淑恵の右手が、明人の股間へとのばされたのだ。湯の中でペニスを隠すように覆っていた手をやんわりとどかし、いきり立つ強張りに指を絡めていく。

（キャッ、すっごい。なんて、硬いのかしら。こんな充実しているオチンチンに触るの、初めてだわ。それに、お湯の中なのに、とっても熱いのが分かる）
優しくペニスを握りこんだ直後、淑恵の性感が一段と目を覚ました。
約八年ぶりに触れた淫茎は、驚くほどの漲り具合を熟女の指腹に伝えてきた。
ゴクッと喉が鳴り、腰がむず痒そうにくねる。同時に子宮が震え、熟襞が妖しい蠢きを開始してしまう。
（こんなこと、してはいけないのに。手が勝手に動いちゃう。うぅん、あそこがムズムズするなんて、何年ぶりかしら。あぁん、ヤダ、乳首まで、しこってきちゃってる）
甥の強張りを握る禁忌を憂える思いがある一方、おんなの本能が硬直を優しくさすりあげていた。指の腹に感じる、若い血潮が充満したペニスの硬さに、熟女の淫欲が頭をもたげてくる。肉洞の疼きばかりか、豊かな乳房にも張りを覚えはじめ、薄茶色の乳暈の中心にある、焦げ茶の乳首がムクムクと屹立してきてしまう。
「あぁん、すっごい。アキ君のオチンチン、本当にカチンコチンになってる」
「くほぅ、はぁ、伯母さん。そんないきなり触られたら僕、でッ、出ちゃうよぅ……」
明人の全身が大きく跳ねあがり、バシャッと大きな水音を立て、湯面が波立つ。
「えっ!?」
（出ちゃうって、まさか、これだけで？　ダメよ、お湯の中で出されたら、後始末が

大変なことになっちゃう）
　甥の射精感を伝える言葉が、本能的な感情に流されがちであった淑恵の、女将としての理性を一瞬、呼び覚ました。
「待って。お湯の中で出してはダメよ。我慢してくれたら、伯母さんがちゃんと、出させてあげるから」
「うっ、うん、はぁ、くはぁ、はぁ……」
　慌てて右手をペニスから離した淑恵は、上気した顔で明人を見つめ、射精感をやりすごすよう訴えた。すると明人は、切なそうに顔を歪めながらも、小さな深呼吸を何度も繰り返し、絶頂感と闘い、なんとか勝利をもぎ取ってくれた。
「はぁ、はあ、あぁ、伯母、さん……」
「ありがとう。よく耐えてくれたわね。さあ、いったんお湯から出て、洗い場に移動しましょう。そうしたらすぐに、伯母さんがこすって出してあげるから」
「うん」
（あぁん、私ったらアキ君の、甥っ子のオチンチンを握って、射精させてあげる約束を……。でも、アキ君はちゃんと我慢してくれたんだもの。だったら私も……）
　自身の口をついた淫らな提案に、熟女の背筋に背徳のさざなみが駆け抜けた。それでも淑恵は蠱惑の笑みを送ると、ザバッと率先して立ちあがった。砲弾状の熟乳が、

タップン、タップンと悩ましく揺れ動き、明人の視線を痛いほどに感じる。
「さあ、アキ君も、こっちに来て」
洗い場へと移動した淑恵が、いまだ湯船に浸かった状態で、恍惚の表情を晒している甥を誘う。
「は、はヒぃ」
完全に裏返りそうな声を出した明人が、興奮で上気した顔で湯船から出てきた。
ペニスに気をまわす余裕がないのか、それとも、率先して見せつけようという思いなのか、下腹部に張りつかんばかりにそそり立つ強張りを、隠す素振りもない。
(はぁン、ほんとに凄いわ。あんなに大きく、逞しいだなんて……)
ブルッと背筋が震え、柔襞が自然と蠢きを強めていく。
ヂュッ、温泉の湯とは別種の液体が、淫唇表面に滲み出したのが分かる。
「お、伯母さん、ほんとに、ぼ、僕のを……」
「ええ、もちろんよ。約束通りに、白いの、出させてあげる」
水滴を滴らせる裸体をウットリとした眼差しで見つめてくる甥に、淑恵は艶然と微笑むと、明人の前ですっと膝立ちとなった。たわわな双乳がタプタプと揺れ動き、その熟れた柔らかさを強調する動きに甥がゴクッと唾を飲みこんだ。
(見られているんだわ。アキ君に裸を、オッパイも、あそこの毛も全部。そして私は

これから、甥っ子のオチンチンを……。はぁん、ほんとに凄い。近くで見ると、熱気に当てられてしまいそうだわ）

裏筋を見せつけるようにそそり立つペニス。若い勢いが前面に押し出されているかのような迫力に、淑恵は圧倒されそうであった。

（アキ君ったら、もうすっかり大人のオチンチンになってる。でも、色はまだ綺麗なピンク色をしていて、可愛いわ）

皮の剥けきった亀頭は、早くもパンパンに張り詰め、先端からはトロッとした先走りが滲み出していた。だがその亀頭は、生まれたての赤子のようなピンク色をしており、そのギャップが熟女の母性をくすぐらずにはおかなかった。

（きっとまだほとんど経験がないのね。いえ、もしかしたら、まったく経験がないのかも。だから、ちょっと握ってあげただけで、すぐに出ちゃいそうに……）

「あぁ、伯母さん……」

「アキ君のオチンチン、とっても大きいのね。じゃあ、触るわよ」

コクッと小さく唾を飲みこみ、淑恵は甥の肉竿に右手をのばした。急角度でそそり立つペニス、その中ほどをやんわりと握りこむ。指腹を焼く血潮の塊に、甘い吐息が漏れてしまった。

「ンほっ、あぅ、あぁ、伯母、さンッ」

「あんッ、硬い。それにとっても熱くて素敵よ」
腰を震わせ、愉悦のうめきをあげる明人に、熟伯母は艶めきを増した声で返すと、太い血管を浮きあがらせる若幹を優しく上下にこすりあげた。
ンチュッと鈴口から先走りが漏れだし、熟女の鼻腔をツンと刺激してくる。その精臭が、眠っていた淑恵の性感をダイレクトに揺さぶった。腰骨が妖しく震え、膣襞がキュンキュンッと肉洞内で本格的な蠕動を開始してしまう。
(はぁン、アキ君のエッチな匂いで、私までおかしくなってしまいそうだわ。でもこれ以上はダメよ。オチンチンをこするのだって、本当は許されないことなんだから)
「はぁ、気持ちいいよ。優しく扱かれると僕、本当にすぐに、出ちゃいそうだよ」
「いいのよ、さっきはお風呂の中で我慢してくれたんだもの。だからいまは、我慢しないで、出してくれていいのよ」
柔和な瞳を淫靡に細めた淑恵は、媚びるような眼差しで明人を見上げると、右手の動きを速めた。
チュッ、クチュッ、溢れ出した先走りが亀頭裏を通って肉竿に垂れ落ち、淫茎と熟女の指の摩擦によって卑猥な淫音を奏ではじめている。
「ンくぅ、あぁ、伯母さん、おっ、伯母、さン……」
「気持ちいいのね。本当に、気持ちよくなってくれているのね」

「うん。僕、こんなふうにされるの、初めて、だから、ぐッ、あぁ……」
切なそうに眉根を寄せた甥の両手が、伯母の両肩に這わされてきた。熱い手の平が、グッと裸の肩を掴んでくる。
（あぁん、やっぱり経験なかったのね。アキ君のオチンチンに触る、私が初めての女なんだわ。佐和子（さわこ）、ごめんなさいね。でも、こんな逞しいのに触っちゃったら、私、久しぶりだから……）
まったくの未経験であることを告げる明人の言葉に、淑恵の性感がブルッと震えてしまった。わずかに残る理性が妹への謝罪を告げる一方、女としての本能が、鋼のように熱く硬い肉竿を愛おしげに扱きあげていく。
「あん、そうだったの。ごめんなさいね、初めて触る相手が、伯母さんで」
「そんなこと、ないよ。だって、伯母さん、くッ、とっても綺麗だし、こすってくれるたびに、大きなオッパイが柔らかそうに揺れて、凄くエッチな感じがしてるもん」
「まぁ、アキ君ったら。大きなオッパイ、好きなの？」
「うん、好き。だから僕、伯母さんのオッパイ見ているだけで、たまらない気持ちになっちゃうよ」
「うふっ、いいわ。だったらエッチにオッパイ揺らしながら、シコシコしてあげる」
恍惚とした眼差しと、愉悦を伝えるかすれた声に、淑恵は艶然とした微笑みで返す

と、右手でいきり立つ肉竿をこすりあげながら、必要以上に上半身をくねらせた。
砲弾状に実った熟乳が、ユッサユッサと悩ましいダンスを踊り、その淫態を明人がウットリと見つめてくる。
（あぁん、感じる。アキ君の熱い視線が、胸に突き刺さってきてる。こんなにじっくり胸を見つめられたのなんて、結婚前、付き合いだした直後以来じゃないかしら）
甥の視線に、熟れた性感をくすぐられる。子宮の疼きは増大し、溢れ出した淫蜜が、いまや内腿に垂れ落ちそうになっていた。脂の乗りきったムチムチの太腿同士をこすり合わせると、ンチュッと小さく蜜音が聞こえるほどだ。
（濡れてる。私のあそこも、アキ君の先っぽ同様、エッチなお汁がいっぱい溢れてきちゃってる。甥っ子のオチンチンでこんな気分になるなんて、私、なんてイヤラシイ伯母なのかしら）
背徳感に背筋が震えた。だが同時に、その背徳な感情が熟女の淫性をより刺激してくる。手淫速度が一段とあがり、肉竿を握る指にも力が加わっていく。
クチュッ、チュクッ……。粘ついた摩擦音がさらに大きくなり、ペニスが胴震いを起こす。同時に亀頭がさらなる膨張を遂げ、クパッと開いた鈴口から、ネットリとした我慢汁が大量に溢れ返った。
「あぁ、伯母さん、いいよ。くぅぅ、僕、本当にもう、出ちゃいそうだよ」

「いいのよ、出して。アキ君のミルク、いっぱいピュピュッしてちょうだい。ほら」
溢れ出る先走りがさらにトロミを帯び、牡臭も濃くなってきた。その鼻の奥をくすぐり、女の淫欲を刺激する香りに、淑恵は悩ましく腰をくねらせながら、それまで遊ばせていた左手を、パンパンに張った亀頭へと這わせた。
ヌチュッとした粘液を漏らす鈴口周辺を、中指の腹で優しく撫でつけてやる。
「ンがッ、ぐふぉ、あっ、あぁ、ダメ、伯母さん、僕、出る。もう、本当に、ぐッ、出ちゃうぅぅぅッ！」
両肩を掴んでいた甥の両手が、グッと熟れ肌に食いこんできた。指の跡が残りそうな強さに痛みを覚えた淑恵の眉が、一瞬歪んでしまう。だが、それを明人に告げる前に、少年の嬌声が浴室内に木霊し、ペニスが脈動を開始していた。
ドビュッ、ずぴゅっ……。鈴口に触れていた左手中指の腹を弾き飛ばすほどの勢いで、濃厚な白濁液が噴き出した。
「あんッ、すっごい、キャッ、熱いのが伯母さんの顔にまで、うぅん……」
指の腹はもちろん、飛び出した欲望のエキスは真正面に陣取っていた熟伯母の顔面にも直撃してくる。ネットリとした欲望液の感触と、鼻腔の奥を強烈に揺さぶる精臭に、淑恵の脳がクラッと揺らされてしまう。
「あぁ、伯母さん、ごめんなさい。でも、僕、気持ち、よくって、それで……」

「いいのよ、出しなさい。伯母さんの顔だろうがオッパイだろうが、好きなところに浴びせてくれていいから、ぅんッ、溜まっているもの、全部出してぇ」
射精の快楽に顔を歪めながら謝罪の言葉を口にする明人に、淑恵は濃厚な精臭に恍惚の表情を浮かべると、小さく首を振り、右手で肉竿を扱きつづけた。
どぴゅっ、ずびゅっ……。強張りが跳ねあがり、そのつど大量の精液が迸り出る。
「おぉぉ、伯母さん。伯母、さン……」
(はぁン、凄いわ。まだ、こんなに勢いよく飛び出してくるなんて……。あんッ、なんて濃くて熱い精液なの。こんなにドロッとしているだなんて)
頬や鼻の頭に飛び散った白濁液が、ベットリと肌に張りつきながら、徐々に垂れ落ちていく感覚に、熟女の性感がゾクリと震えてしまった。
鼻に飛び散った粘液の一部が、ほうれい線に沿うように朱唇の端に到達する。甘い吐息をつき、悩ましく半開きになっていた肉厚の朱唇。その隙間から甥の精液が少しだけ流れこんできた。
(あんッ、甘い。アキ君の精子、苦みやえぐみより、甘さを感じるなんて。やっぱり若い子は、この味も違うのね)
朱唇に入りこんだ欲望のエキスを舌先に感じた瞬間、熟女の快楽中枢が驚きに見舞われた。明人の精液は、それまで淑恵が味わったことのない甘さを内包していたのだ。

その間にも射精の勢いは徐々に失われ、飛び出した白濁液は顔面ではなく、首筋や豊満な乳房に降り注いできた。
「うンッ、はぁ、こんなにたくさん、出るだなんて、凄いわね、アキ君。そんなに気持ちよかった？」
「はぁ、はあ、はぁ、うん、すっごく、気持ち、よかったよ。ありがとう、伯母さん」
十五回近い脈動の末、ようやくおとなしくなったペニスから右手を離し、淑恵は欲望のエキスを滴らせる淫顔で甥を見上げると、明人は絶頂で蕩けた顔でコクンと頷き返してきた。
「うふっ、なら、よかったわ」
精液パックを施された凄艶な顔で微笑みかけた淑恵だが、実際は昂った自身の淫欲を抑えつけるのに必死であった。
（はぁン、あそこのウズウズが止まらない。アキ君の濃厚な精液の匂いに、頭が完全に酔ってしまいそうになってる。でも、ダメだわ、これ以上のことはさすがに、伯母が甥にしていいことではないわ。でも……）
疼く肉洞内では膣襞の蠕動が顕著となり、止め処なく溢れ返る淫蜜が、いまや内腿の半ば付近まで垂れ落ちてきていた。
刺激を欲しているのは、なにも淫唇ばかりではない。張りを覚えた乳房の頂上では、

焦げ茶色の乳首がピンッと屹立し、優しく転がしてもらえる瞬間を待っているのだ。
「はぁ、ンはぁ、まさか、伯母さんにこんなことしてもらえるなんて、僕、いまでも信じられないよ」
「伯母さんもよ。まさか佐和子の、妹の息子であるアキ君のオチンチン、こすってあげることがあるなんて、考えたこともなかったもの」
興奮と浴室の蒸気で、明人の顔には玉の汗が浮かんでいた。顔だけではない。少年らしく、若く引き締まった身体にも汗は浮かび、全身を光らせている。
「あぁ、伯母さん。でも、本当にごめんね。伯母さんの顔に、僕いっぱい……」
「うふっ、いいのよ、気にしないで。ここはお風呂なんだから、すぐに流せるでしょう。さあ、オチンチンを綺麗にしたら、一緒におそう、じ……。えっ！　す、凄い、アキ君の、まだ、そんなに大きなままだなんて……」
再度謝罪の言葉を口にする甥に、艶然と微笑んだ淑恵は、その視線を明人の股間に向けた瞬間、息を呑んでしまった。
大量の白濁液を放出してなお、少年の強張りは天を衝く勢いを維持していたのだ。いまだ張り詰めている亀頭先端からは、トロッとした粘液が糸を引くようにして、浴室の洗い場に向かい、細く垂れ落ちている。
（あんなに大量に出した直後で、まだ、こんなに……。なんて、逞しいのかしら）

驚きと同時に、八年もの間、満たされることなく孤閨を託ってきた淫唇がキュンッとわなないてしまった。
「あっ、これは……。ほ、本当に、ごめん、伯母さん」
明人が大慌てで股間を両手で覆い隠す。初めて勃起を見つかった直後と同じような反応に、淑恵は思わず優しい笑みを浮かべた。だが、その初心な反応は、母性ばかりでなく、熟女の淫性も妖しくくすぐる結果となったのだ。
「あんッ、ダメよ、隠しちゃ。いまさら恥ずかしがることないでしょう。伯母さんの顔やオッパイに、こんなに濃いのいっぱい浴びせたくせに」
豊乳をネットリと垂れ落ちている白濁液を右手の指で掬い、悩ましい女の顔で甥にその粘つきを見せつけた淑恵は、すぐさまペニスを隠す明人の両手に右手をのばした。
「お、伯母さん」
「ほら、手をどかしてちょうだい」
艶然と微笑み、強張りから両手を離させる。
天を衝く偉容のペニスが、堂々とした姿を再び晒してきた。
先ほどの精液の名残で、うっすらと白い膜に覆われている裏筋や亀頭に、四十路熟女の性感が、ブルリと刺激を受けてしまう。
（はぁ、凄いわ。ほんとに、なんて逞しさなのかしら）

右手が再び硬直にのばされ、先ほど同様、肉竿の中央をやんわりと握りこんだ。
「ンはっ、あぅ、お、伯母、さンッ。ダメ、出したばっかりだから、いま、触られたら、僕、また、すぐに……」
「いいわよ。出しなさい。溜まっているミルク、伯母さんが全部、搾ってあげる。いっぱい出していいのよ。――はぅッ」
淫靡に濡れた瞳で甥を見つめた淑恵は、再び視線をペニスに向け、艶顔を硬直に近づけた。天を衝く強張りを少し押しさげ、甘い吐息が漏れる朱唇に迎え入れていく。
(あぁん、入れちゃった。アキ君の勃起したオチンチン、今度はお口に、迎え入れてしまったわ。こんなこと、許されないことなのに)
「お、伯母さッ、ンがッ、ぐッ、あぁぁ〜〜……」
「ンぐッ、うぅん、はぅ、ぅン、チュパッ、ヂュッ、ぢゅちゅっ……」
明人の驚きの声が広い浴場に反響し、熟伯母の鼓膜を震わせてくる。
淫欲に負け甥の強張りを朱唇に咥(くわ)えこんでしまった淑恵にとって、その驚きと愉悦の混ざり合った声は、羞恥に染まる背徳感を煽ると同時に、高まりつづける女の本能をくすぐるものでもあった。
(むぅン、すっごい。アキ君のオチンチン、一度出しているのに、ほんとになんて硬くて、熱いのかしら。それに、精液の匂いが、鼻の奥から脳天に直接突き抜けてくる

から、私、ますますおかしくなってしまいそうだわ）
　ボリューム満点のヒップが妖しくくねり、むっちりとした太腿同士を軽くこすりつけてしまう。淫唇がわずかによじれ、溢れ返った淫蜜が、ンチュッと艶めいた水音を立てる。そのかすかな刺激に、子宮がまたしても震え、快楽中枢に揺さぶりをかけた。
（あんッ、いい。アキ君のオチンチンをお口に咥えながら、自分のあそこにも刺激を送ろうとするなんて、私、なんていやらしいの）
「ンおぉぉ、伯母さん！　伯母、さンッ……」
　明人の両手がミディアムショートの黒髪に這わされ、快感を伝えるように、クシャッと掻き毟ってくる。
「ぢゅぱっ、クチュッ、チュパッ、チュヂュ……」
　甥の愉悦の声を心地よく聞きながら、悩ましく眉根を寄せた淑恵は、肉厚の朱唇でキュッと強張りを締めつけながら、一心に首を上下させるのであった。

（まさかこんな、伯母さんにフェラチオまで、してもらえるなんて……）
　愉悦に霞みそうになる目を下腹部に向ければ、そこには全裸で浴室の洗い場にしゃがみこみ、白濁液に濡れた顔でペニスを咥えこむ伯母の姿があった。
（本当に咥えこまれてる。伯母さんのお口に、僕のが、おぉぉ……。揺れてる。伯母

さんが首を振るたびに、大きなオッパイが、タプタプ、エッチに揺れて太腿に……）
砲弾状のたわわな熟乳が、柔らかそうに揺れ動くさまに、明人の性感がさらに煽られた。というのも、淑恵の首律動に合わせて豊かな柔乳が明人の太腿に、ペチ、ペチと当たり、ひしゃげていたのだ。
（あぁ、伯母さんの大きなオッパイ。柔らかくて、とってもエッチだよぅ）
ムニュ、ムニュと太腿に当たる双乳の感触に、ビクンッと大きく腰が震える。口腔内に入りこんでいる強張りをも胴震いが襲い、限界までいきり立つ肉竿にいっそうの血液を送りこんでしまう。
「ンぐッ、うぅン、むぅ、うンッ、ヂュッ、クチュッ、チュパ……」
直後、悩ましく歪んでいた伯母の眉間に、いっそうの皺が寄った。苦しげなうめきを鼻から漏らしつつも、ペニスを解放しようとはしなかった。
経験の豊かさを示すように、膨張した淫茎にすぐさま対応し、窄めた朱唇で強張りのこすりあげを再開し、さらには張り詰めた亀頭に、ぬめる舌先を絡めてきた。
（や、ヤバイ。伯母さんのお口、とっても温かくて、ちゅぷちゅぷした唾液で、僕のが溶けちゃいそうなほど、気持ちいいのに、さらに、舌まで絡められたら……）
口腔内のヌメリの艶めかしさにプラスして、舌先が亀頭裏の窪みに入りこみ、チロチロと掃いてくる。むず痒くなりそうな、それでいて病みつき感のある悦びが、一気

に脳天に突き抜けていく。
「ンほぅ、伯母さん、くッ、すっごいよ。そんな舌で先っちょこすられたら、僕、気持ちよすぎて、また出ちゃうよ」
眼窩を悦楽の瞬きが襲い、睾丸がキュンッと迫りあがった。一度の放出では治まらなかった欲望のマグマが、グツグツと音を立て噴火口に上昇してくる。
熟伯母の頭部に這わせた両手で、黒髪をさらにクシャクシャと掻き毟っていく。
「ぢゅぱっ、クチュッ、ふぅン、チュパッ、ぢゅちゅ……」
「はぁ、伯母さん、出る。僕、ほんとにもう……。くぅぅ、いいの？　このままお口の中に、出しちゃっても、うっ、おぉぉ……」
上目遣いに見つめてくる淑恵に、必死に射精感と闘いながら問いかけた。
すると伯母の左手が明人の腰の後ろに這わされ、グイッとさらに引き寄せる動きを見せた。さらには、首律動のスピードのギアが、またひとつあがった。
「ぢゅぽっ、グチュッ、ぢゅちゅっ、クチュッ、チュヂュ……」
「いいんだね、出して。伯母さんの、口の中に、僕、あぁ、出る。また、ぐッ、出ちゃうぅぅ〜〜〜〜ッ！」
その瞬間、明人の眼前が快感のあまり真っ白に塗り替えられた。
二度目の射精を告げる嬌声が大浴場に木霊したときには、ペニスはすでに射精の脈

動を開始していた。
ドビュッ、どぴゅっ……。膨張した亀頭先端が弾け、二度目とは思えないほど大量で濃厚な欲望のエキスが、淑恵の喉奥に叩きつけられていく。
「ンぐッ！　むぅン、ぅんッ、コクッ……コクッ……ぅンッ、ゴクンッ……」
「あぁ、飲んでる。伯母さんが、僕の、精液、飲んでるぅぅ。ダメ、そんなエッチな姿、見せられたら、僕、また、出ちゃう。もっと、出ちゃうよぅ」
柳眉を歪めながらも、なおペニスを解放することなく、迸り出る白濁液を嚥下(えんげ)してくれる淑恵の姿に、明人の総身が感動で打ち震えた。その震えは脈動をつづける強張りにも伝わり、どぴゅっ、と新たな精液を熟女の喉奥に放っていく。
その後さらに十回近い痙攣の末、ようやく吐精は治まったのであった。
「ンふっ、むぅん、うンッ、コクン……ヂュッ、ちゅぅぅぅ、ゴクッ……ンぱぁ、はぁ、いっぱい、出たわね。すっごく濃いんで、伯母さん、ビックリしちゃったわ。でも、とっても美味しかったわよ」
輸精管に残った残滓、その最後の一滴までも吸い出してくれた淑恵が、ペニスを解放した直後、明人は膝から下の力が一気に抜けてしまった。くずおれるように、洗い場に座りこんでいく。
「はぁ、はあ、あぁ、お、おば、伯母さん……。あ、ありがとう。本当に、凄く気持

ち、よかったよ」
普段の母性的雰囲気とはまったく違う、凄艶な色気を纏った伯母の淫顔を恍惚の表情で見つめた明人は、かすれた声で悦びを伝えた。
「うふっ、よかったわ。これは二人だけの秘密。百合香にも絶対に言ってはダメよ」
「うん、分かってる。絶対に、誰にも、言わないよ」
匂い立つ淫性を見せつける淑恵に明人は、興奮と浴室の蒸気で汗まみれになった顔で大きく頷き返すのであった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/